

慶長14年の大火災で隠居した富山城が焼失。
富山城再建を断念し、高岡へ

前田利長と 富山城

最近、富山城の発掘工事が進み、富山市埋蔵文化財センターによる様々な発見が報道されています。そこで、今回、前田利長と富山城の関係についておさらいしてみよう。

富山城は戦国時代の天文12(1543)年、神保長職じんぼうながもとが家臣の水越勝重に築かせたとされています。その後、天正10(1582)年に、佐々成政が越中の領主となり入城しました。しかし、秀吉に歯向かったために、天正13(1585)年、10万の大軍に攻められ降伏。秀吉により、越中は前田家に与えられました。

慶長4(1599)年、利家死去により、利長が加賀藩主となり、豊臣家五大老の一人になりました。ところが、前田氏を屈服させようとする徳川家康の謀略があり、加賀征伐が計画されました。利長は、

豊臣家に救援を求めましたが断られたため、実母の芳春院(まつ)を人質として江戸の家康に差し出すこと、異母弟の利常と珠姫(徳川秀忠の娘)を結婚させること、自身の隠居などを約束することで戦いを回避しました。その後、関ヶ原の戦いで徳川方について働いた功により、加・越・能の3ヶ国120万石の領有を徳川氏に承認されました。

慶長10(1605)年、利長は約東どおり、隠居しました。44歳の若さでした。養老の地として選んだのが富山でした。そして、利長は、富山城や城下の再編成を行いました。

利長は、父・利家とともに招かれたことのある秀吉の聚楽第を手本に富山城を改修します。また、瓦に家紋をつけたり、「鏡石」と呼ばれる巨石を置くなど、実質的な

支配者としての立場を表明しました。この時、利常はまだ12歳。藩の実質的な権力はまだ利長が握っていたのです。なお、鏡石は、富山城の入口の石垣に5つあります。

さて、利長が力を入れて改修した富山城ですが、慶長14(1609)年に、いたち川べりの柄巻屋彦三郎宅から失火し、城下町とともに残らず焼失してしまいました。

「神通川と呉羽丘陵」(廣瀬誠著・桂書房)によると、富山の春先のフェーン現象下の火災は、劔岳から吹き下ろす「劔の火事」と恐れられたほど猛烈だったそうです。土蔵に難を避けた女中達も「ことごとく焼死した」といいます。

前田利長は、かろうじて脱出、富山町の南限の町端にあつて焼け残った神戸清右衛門宅に3日間逗留し、魚津に移ります。

大火の印象は強烈で、利長は富山城再建を断念し、射水郡関野に新しい城を築き、その地を「高岡」と名付け、城下町を開きました。なお、富山市埋蔵文化財センターのホームページによると、利長は城の全焼に大変ショックを受け、その心情をつづった手紙を多く残しているそうです。また、高岡城の水堀がとてつもないのも、火の粉が飛んでこないよう、富山城での経験を生かした対策だったと考えられるということです。

慶長19(1614)年、利長は亡くなります。正保3(1646)年、利常は、33回忌に、利長の院号にちなんで菩提寺を瑞龍寺と改称し、新たに建物を造営しました(平成9年、国宝に指定)。

寛永16年(1639年)、3代利常が加賀小松に隠退する時、幕府の厳しい監視の目をやわらげるた

め、加賀・越中・能登の120万石のうち、婦負郡6万石の他、下新川郡浦山辺、新川郡富山辺、加賀国能美郡の一部の計約10万石を次子利次に与え富山藩が誕生します。当初、利次は、百塚に築城することを考え、富山城を仮城にしています。ところが、財政的にも厳しく断念しました。また、領地が分散して治めにくかったため、万治3年(1660)年、利次は加賀藩と富山藩の領地を交換する許可を得て、富山町は富山藩の領地となりました。翌年から、幕府の許可を得て、富山城の修復と城下町の本格的な整備が始められました。そして、13代続く富山前田家の居城となったのです。

歴史に「もし…」ということはありませんが、慶長14年の大火事が必要ならば、富山の町は今とは異なっていたかもしれません。◎